

氏名	染谷 聡		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	第70号		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	漆芸における形態・文様・プロセスの考察 —咀嚼する加飾—		
審査委員	主査	教授	栗本 夏樹
		教授	吉田 雅子
		准教授	安井 友幸
		准教授	森野 彰人
			外館 和子（美術評論家）

論文の要旨

本論は、漆芸における形態と文様を別個のものとして、両者を融合させながらそれぞれを発展させるにはどうしたら良いかという問題を、自作における形態、文様、プロセスを再考することによって「加飾」の観点から考察したものである。

従来、個別的制作プロセスとして捉えられていた形態の成型作業と、「塗る」、「研ぐ」という下地工程、及び「描く」、「蒔く」等を中心とする加飾工程を相互に絡み合わせ、そこから生じる偶発性を取り込みながら、新たな表現の可能性を求めた。

その結果、筆者は「塗る」「研ぐ」という行為を、従来のように下地工程であるとは考えず、加飾のプロセスの一部と捉え直し、その一連のプロセスを新たな加飾の可能性として提示した。また、このような筆者の表現行為を背後で支えているのは、自由な「遊び」の精神である。

本論では、筆者のこれまでの制作を、第1期「文様と形態のあそび」、第2期を制作上での諸問題を「再考・葛藤」した時期、第3期を「文様・形態・プロセスのあそび」といった3つの時期に大別し、具体的な作例をあげながら「素材」「形態」「行為」「プロセス」「文様」について再考した。第1期は、「文様」と「形態」と戯れた時期であり、筆者は、自作の具象的形態から文様のイメージを引き出していった。ここでの筆者の遊びは、形態よりも文様の視覚的表現にあり、モチーフに関連するイメージの中から自身の趣味趣向にあう文様を選択した。その際、それらの多くは、筆者にとって現実味のある同時代性の高い文様であり、本論ではそれを「現代的文様」と称した。文様に作り手と同時代の要素が反映されることは、時代を問わず行われてきたことであり、筆者の作品に見られるマンガなどの日常的な文様もまた、ある意味では必然的な文様表現であるといえよう。

次に、制作上の諸問題における「再考」と「葛藤」の時期を第2期としてあげた。この時期、筆者の

遊びは、形態や文様に向けられると共に、「素材」や「技術」などにも向けられた。様々な方法を試みるうちに、形態と文様において変化が生じた。特に形態はこれまでよりも複雑になり、抽象化した。このように形態が具象性を失っていった結果、文様を想起するための具体的な主題を、形態から引き出すことが難しくなり、形態とは直接関係のない筆者の私的出来事を文様化したものが形態の表面に描かれるようになった。この時点で、形態と文様を結びつけるものが希薄になり、両者は徐々に乖離してしまった。これが、形態と文様の関係に生じた「葛藤」であった。この葛藤によって、文様として何を描くかということから、描く「行為」そのものへと視点を移していくことになり、制作プロセスがどうあるべきかを再考することに繋がった。

第3期は、「文様」「形態」「プロセス」と戯れた時期であった。先述した「葛藤」を克服する上で筆者が重要視したのは、形態と文様をそれぞれ発展させ、また、双方に自身の表現をしっかりと込めつつ、両者の距離を近づけるためにはどうしたらよいかという問題であった。その問題を抱きながら、「素材」「形態」「技術」「行為」「プロセス」「文様」について再考し、自身における新しい加飾の在り方を探究した。

その中で、先述の筆者の葛藤を検証、探求するために漆芸の枠組みを再考していった結果、漆芸における「研ぎ破り」が、この葛藤を克服する契機となった。研いだ結果下地が見えてしまう「研ぎ破り」は、従来研ぎの工程での避けるべき現象であるが、筆者はこの「研ぎ破り」を失敗ではなく、形態に伴ってできた表情として捉え直すことで加飾の考察を展開した。

こうして「研ぎ」に対する意識を変えた結果、美しく研ぎあげるための「塗り」の作業は、より自由な「描く」行為へと変換され、塗膜をつくることに新たな意味合いが生まれた。また、研ぎの失敗を恐れて造形意欲を控えることの必要性がなくなり、漆芸の技術に捕らわれずに形態を模索することが可能になった。さらに、研ぎ破りによって現れた表情を文様に見立て、そこに加飾することで、施された文様などは自ずと形態に連動した在り方となった。

従来の漆芸における制作プロセスは、形態を成型する工程、下地工程、加飾工程の3つに大きく分業されており、それぞれが別個の工程となっていたといえる。しかし、筆者は「研ぎ破り」の在り方を再考することで、「形態」と、従来下地工程とされてきた「塗り」や「研ぎ」という行為と、従来加飾とされてきた「描く」「蒔く」「埋める」という行為を密接に結びつけた。こうした新たな表現に向かって連動させた工程を、広義の「加飾」行為として捉え直し、そこに現代の漆芸に寄り添った加飾の新たな可能性を見いだしたのである。

筆者にとって、第1期は文様と形態と戯れ、第2期において素材や技法と戯れた。そして、第3期になって、それらを如何に咀嚼するかという点に、筆者の遊びの重点が移っていった。換言すれば、既存の枠組みを飛び越えて、「形態」と、「塗る」、「研ぐ」という行為と、「文様」を「描く」、「蒔く」などの行為を綯い交ぜにして自由に戯れること、それこそが筆者が見出した、加飾の新たな可能性である。

終

審査結果の要旨

審査作品

- 1、「おすまじる代」2009年
- 2、「御椀獣三郎」2009年
- 3、「おけもの」2010年
- 4、「む」2010年
- 5、「おももの1」2011年
- 6、「無題」2011年
- 7、「うらがえりたいのために」2011年
- 8、「あれるるるるれれよ」2012年
- 9、「てとな」2012年
- 10、「はるのあさのみそしるのゆげの」2011年（2013年加飾加筆）

本審査における作品展示では、博士課程で取り組んだ作品の中から論文内容とよく対応する作品10点を選んで、作品の変遷をたどるように展示された。

染谷氏の作品を特徴づける要素として、作品の中に、お椀や、すし桶、風呂桶などの器物がオブジェ作品に取り込まれている点が上げられる。その御椀から汁や湯気が飛び出し、桶から湯が流れ出し、人のような「もののけ」のような不思議な有機的なフォルムが形づくられている。その有機的なフォルムが漆という素材によって形づくられることで、独特な艶かしさをもった存在となっている。また、染谷氏の作品を特徴づける要素として、有機的なフォルム全体を覆い尽くすように施された装飾表現が上げられる。その装飾は従来の文様に加え、キャラクターや文字、マンガやオノマトペ、既存の記号やロゴマークなどが、遊び心満載で描き込まれている。ユーモラスで有機的なフォルムの不思議さに加えて、引き込まれてしまいそうなユニークな細部の表現が染谷ワールドとでも呼びたくなるような独自の世界観を醸し出している。そのような染谷氏の表現行為を背後で支えている重要な要素として日本人の自由な「遊び」の精神が上げられる。論文では、江戸時代の文様の中に見ることができる視覚的遊びとして「謎染」「判じ絵」「小紋雅話」を取り上げ、それらに用いられる「見立て」「地口」「縋い交ぜ」等の遊びの手法を解説しながら、自身の制作の中でそれらの手法が生かされている様子を各所で論及している。

だが、2011年に制作した作品「はるのあさのみそしるのゆげの」では、形態の抽象化が進み、形態から文様をイメージすることが難しくなるという事態に直面することになった。そのことに伴い、文様はより個人的なものとなり、形態と文様が分離しているような印象の作品となった。この経験から染谷氏は、描くもの（文様）と描かれるもの（形態）を結びつける何かが必要なのではないかと強く感じるようになった。その後、この葛藤の克服のために、素材、形態、行為、プロセス、文様の関係性を再考し、新たな加飾の在り方を探求して行く。その結果、かたちと文様の関係を、単にバランスの調整や均衡を図るというレベルではなく、より独創的で、相乗効果をもたらしうる関係を構築するために「研ぎ破り」という現象に着目し、一つの手法に発展させて行った。作品の表面に偶然出現する「研ぎ破り」という現象から、新たなイメージを連想し、その形や色から触発されて加飾を描き加えて行くことで、形態と文様がよ

り強く結びついた表現を獲得したのである。本審査に展示された作品群は漆芸における加飾表現の今日的在り方に一つの答えを示すものであり高く評価できる。

染谷氏は、加飾行為について本人自身が感じたさまざまな疑問に対し、一つ一つを制作行為によって「実験」し、確認・考察するという制作者ならではの検証を愚直なまでに積み重ねている。その結果を具体的な作品の変遷をたどりながら考察した内容が論文として纏められている。

審査教員からは次のような意見が述べられた。

①染谷氏の作品は、江戸時代の手拭や判じ絵にみられる遊びの手法を使った文様や、その形態から派生してくる言葉や擬音を漆の塗面に無作為に貼り付けたような印象を持ち、独特なフォルムと相まって得も言われぬ存在感のある作品となっている。

②過去の装飾のありように関する歴史認識等については、必ずしも充分吟味がなされたとは言い難い部分もあり、あるいは「加飾」を行為として捉える際の「道具」との関係など、さらなる探求も欲しいところではあるが、何より受審者自らの実験的製作による検証を伴う論文として大変興味深い内容を含んでいる。

③本論文は学術論文とは言い難いが、参考文献の数の多さは、実制作と理論をどのように関係させるかを精緻に模索した結果であり、個人の制作ノートのような形式をとりながら、制作と理論を橋渡しする貴重な論文であると言える。論文中の語彙に少し矛盾する箇所が見られるが、制作における考察の精度は極めて高く、博士論文としての水準を十分に満たしている。

④制作者の立場から漆という素材に真摯に向き合い、苦悩と葛藤を克服しながら常にそれと遊ぶことに全力を傾けた、氏の学生生活のすべてを見て取れる内容であると共に、漆の加飾表現を志す者の指針として重要な論文となっている。

以上のような意見をもとに議論した結果、審査員全員一致で、染谷聡氏の博士（後期）課程本審査を合格と判定する。

論文主査教員

染谷氏の論文は、漆芸における形態と文様を別個のものとしてせず、両者を融合させながらそれぞれを発展させるにはどうしたら良いかという問題を、制作における「葛藤」として提起した。そして、従来、個別の制作プロセスとして捉えられていた形態の成型と、「塗る」、「研ぐ」という下地工程、及び「描く」、「蒔く」等を中心とする「加飾」の工程を相互に絡み合わせ、そこから生じる偶発性を取り込む一連のプロセスを、加飾の新たな可能性として提示した。

この論文は、大きく前半と後半に分けられる。前半の第1章では、文様、装飾等の関連する用語の整理、第2章では、自制作のアイデアソースとなった江戸時代の判じ絵等の視覚的遊戯や戯作等の考察、第3章では、自制作に用いる蒔絵、漆絵等の関連技法の整理を行った。

後半において自制作を論じるにあたり、それを3つの時期に大別した。第4章では、具象的形態から様々な文様のイメージを引き出して、形態の表面に貼りつけるようにちりばめる第1期の作品をとりあげた。

第5章では、制作上の諸問題を再考し葛藤した第2期の作品を取り上げた。形態が複雑化、抽象化した結果、文様を想起するための具体的な主題を形態から引き出すことができなくなった。形態とは直接関係のない私的出来事等を、文様として形態の表面に描いた結果、形態と文様を結びつけるものが希薄になり、両者が乖離していった。ここで、形態と文様をそれぞれ発展させつつ、両者の距離を近づけるためにはどうしたらよいかという問題に行き当たった。

第6章は、この問題を可決しようと試み、「素材」「形態」「行為」「プロセス」「文様」について再考した第3期の作品を取り上げた。従来の漆芸における制作プロセスでは、形態の工程、下地の工程、加飾の工程の三つが、別個の工程となっていた。しかし染谷氏は「研ぎ破り」の在り方を再考すること等を通して、「形態」と、従来下地工程とされてきた「塗り」や「研ぎ」という行為と、従来加飾とされてきた「描く」「蒔く」「埋める」という行為を密接に結びつけた。こうした新たな表現に向かって連動させた工程を、広義の「加飾」として新しく捉えなおし、そこに現代の漆芸における加飾の新たな可能性を見いだした。

この論文を完成させるに当たり、前回の見極めの際には内容、用語、表現に関して多くの指摘がなされた。染谷氏はこのような指摘を一つ一つ慎重に考え、丁寧に文章に起こし、論文の構造を組み替えた。その結果、最終論文では、思考の精度が以前に比べて遙かに緻密になり、思考が順序立てて展開され、問題を提示して解決するプロセスがよくわかる構造に仕上がっている。

この論文は、以下の点が評価できる。染谷氏は、問題を解決する糸口として、複数の発想の転換を行った。染谷氏は下地が見えてしまうことを失敗と解釈せず、それをポジティブな現象と捉えなおし、研ぎ破りと称して制作に積極的に組み込んだ。また、従来加飾は、文様を主体に語られることが多かったが、染谷氏は文様を描くという行為そのものに着目し、その位置づけを再考した。そして、「見立て」という遊戯性の高い要素を最大限に生かすことにより、描くという行為を他のプロセスとうまく連動させることに成功した。言葉を手がかりに連想ゲームのように制作プロセスを関連づけてゆく手法は、染谷氏が江戸時代の遊びを基に独自に作り上げた手法である。以上の点は高く評価されて良いだろう。

染谷氏は加飾の概念と、自らが考える新しい加飾のあり方を図に起こして整理した。また、自作を一覧表に落とし込み、作品の核となる要素を抜き出して、その変遷を明示した。このように、自作の要素をできるかぎり客観的に分析して提示する努力をしたことも評価に値する。

この論文は、先述したような多くの修正がすでに加えられているが、それでもまだ一部に問題が残っている。装飾等に関して歴史的認識が十分でないこと、研ぎ破りに関してさらに多くの類例を上げ、それらとの差異を明確にする必要があること、材料や道具に対してもさらなる言及が必要であること等が指摘された。これらの点は、染谷氏が更に深く考察していくべき今後の課題と言える。

しかし、この論文は、以上に上げた問題点にあまりある、価値ある論文であるというのが、審査員全員の意見であった。文様や装飾に関しては美術史等の立場から複数の著述がなされてきたが、制作者の立場から実制作を通して加飾という行為をこのように考察するものは稀少で、先行する研究や参照できる理論がほとんどみられない。この論文は大変貴重であり、漆工領域の最前線において現代の歴史を形成する京都市立芸術大学の博士論文としてふさわしい。

この論文が高く評価されるのは、作家が実制作を記録して分析する、制作論文としての価値である。染谷氏は、制作者の切実な悩みから出発し、葛藤という、いわば制作における混乱状態に陥りながら、そのような自分の制作を真摯に見つめ、一つ一つ段階を踏みながら葛藤の原因が何であるのかを考え、どうしたらこれを乗り越えることができるのかを考え抜いた。論文を書くことにより自分の問題を客観視し、

それを整理して解決する道を見いだしていった。この論文の制作態度や思考プロセスは、同時代の作家や後に続く制作者にとって等身大で共感できるものであり、影響を与えうる論述となっている。

染谷氏の論文は、今後の課題がいくつか残されたものではあるが、制作中心の博士論文として十分な水準に達している。そのため、審査員全員一致で、この論文は合格であると判断した。